名古屋大学博物館報告
Bull. Nagoya Univ. Museum
No. 16, 11－32, 2000

# 中国の八部衆の図像について（2）
## ～甘粛省敦煌莫高窟・安西楡林窟の八部衆像の報告をかねて～

# A study of the Eight Devas in China (2): as a report of the Eight Devas in the Mogao caves in Dunhuang and the Yulinku grottoes in Anxi

水野　さや（MIZUNO Saya）[1)]

1）名古屋大学大学院文学研究科博士後期課程
Student of Doctoral Course, Department of Aesthetics and Art History, Graduate school of Letters, Nagoya University

Abstract

This study deals with the Eight Devas (八部衆) of the Mogao caves in Dunhuang and Yulinku grottoes in Anxi. By fieldwork done from 1998, other areas often contain a special iconographical image which is not seen in the Eight Devas of this area. First to introduce the main works of this area, secondly to survey age chage, and finally we may be able to through the comparison of another areas between works be going to express the Eight Devas' acceptance and local arrangement.

## はじめに

中国における八部衆像の現存作例は，四川省の諸石窟・諸龕および甘粛省の敦煌莫高窟と安西楡林窟に多く報告されている。また，韓国においては，主に統一新羅後期から高麗前期（8世紀後半～10世紀前半）に建立された石塔の浮彫り像として，八部衆像が多く造像されている。ところが，中国の中原地域における作例は，管見のおよぶ限りでは，わずかに河南省洛陽竜門石窟賓陽北洞に確認されるにすぎない。例えば，十二天がヒンドゥー教における八方天をそのまま継承したものではなく，中国の中原地域において再構成された集合尊であることはすでに明らかにされているように[1)]，八部衆に関しても中原地域においてその概念と図像が成立したという見通しを持っているが，現存作例の少なさから中原地域における八部衆像については十分に明確にされない状態にある。

そこで，各地に現存する八部衆像を地域的に特徴付ける作業を行い，それを総合することが，中原地域における八部衆像の様相の復元にあたり重要な手がかりになると思われる。このような八部衆像の総合的な研究の一端として，これまでに韓国の石塔の八部衆像[2)]および広元皇沢寺をはじめとする四川省の八部衆像[3)]を取り上げ，各地域における八部衆像の図像とその展開の様相ついて考察を行ってきた。本稿もその一環であり，中国における造像のもう一つの拠点である甘粛省の作例について取り上げる。

## 1．八部衆像の概要

平成11年度文部省科学研究（国際学術研究）「インドから中国への仏教美術の伝播と展開に関する研究」（代表，名古屋大学大学院文学研究科教授宮治昭）[4] に伴い，敦煌莫高窟および安西楡林窟の調査を行う機会をえ，これまで報告されていた作例に加えて未報告の作例についても調査を行うことができた。本稿はその成果をまとめ，莫高窟および楡林窟の八部衆像の様相を明確にしようとするものである。両石窟群における八部衆像の造像は初唐から五代におよび，いずれも八部衆の各尊像が単独像としてあらわされることはない。後述する晩唐～五代の作例を除き，多くは仏・菩薩などの主要な尊像の背後に積み重なるように描かれており，像の上半身（胸部以上）のみが表現され，持物など描かれない場合が多い。八部衆像が描かれる壁画の保存状態は必ずしも良いとはいえず，後の補筆がおよんでいる箇所もある。しかし，同窟内の仏・菩薩像ほどの著しい描き加えは行われておらず，図像的には当初の姿を保持している場合が多い。

【表１】は莫高窟，【表２】は楡林窟の各窟にあらわされた主な八部衆像について，その図像的特徴，八部衆を構成する像の数，本尊の尊名・主題などをまとめたものである。莫高窟および楡林窟の八部衆像は，まず，服制や相貌などの点から，⑴着甲神将形像，⑵鬼神形像，⑶多面多臂形像，⑷天部形像の４種類に大別される。⑴着甲神将形像は上半身・下半身ともに着甲し，兜を被るものもあり，武装した神将像の姿の尊像である。⑵鬼神形像は頭髪を炎髪もしくは巻髪とし，上半身裸形で筋骨たくましい異形の尊像である。八部衆の中の⑶多面多臂形像は，三面六臂もしくは三面四臂で左右第一手を合掌手とし，左右第二手に日輪・月輪を持つ。このような図像は中国の他の地域においても確認されるように，阿修羅の特徴といえる。したがって，莫高窟および楡林窟における八部衆中の多面多臂形像も阿修羅である。⑷天部形像は着甲せず，忿怒相をあらわさない尊像である。全体的に，莫高窟と楡林窟の八部衆像においては，⑴着甲神将像形と⑵鬼神形像の占める割合がかなり高い。

なお，本稿および表中においては，各像の図像にもとづいて尊名同定が可能な場合はその尊名を記し，その他の尊像については尊名同定に関係すると思われる図像的特徴を用いた仮称とする。表中の多面多臂形像（阿修羅）の持物は日輪・月輪を除いた持物のみを記入し，各臂は胸前で合掌するもしくは持物を持つ手を左右第一手とし，それ以外の手は上から順に左右第二手，左右第三手とした。

それでは，まず，莫高窟初唐から五代窟まで，楡林窟晩唐・五代窟の順に調査におよぶことができた作例を紹介し，次に各図像ごとの特徴と変化を述べ，年代的な変化をまとめ，四川省の作例との比較を通して，この地域における八部衆像の受容と展開の様相を明らかにしたい。

### 敦煌莫高窟　初唐窟

初唐窟において，八部衆らしき集合尊像は第220窟，第340窟，第334窟，第332窟などに登場する。

第220窟北壁の七仏薬師浄土変[5] では，中央須弥壇上に横一列に並ぶ七仏薬師如来立像と，それぞれの脇侍菩薩像をあらわす。須弥壇手前の蓮池に設けられた舞台では，奏楽天が舞楽を奏でている。向かって画面右側の一団は吽形の力士像を先頭とし，その後方に①～⑦像，向かって左側の一団は阿形の力士像を先頭とし，その後方に⑧～⑭像をあらわす。

①阿修羅（その１）：三面六臂で左右第一手を合掌手とし，左右第二手は日輪・月輪を持つ。左右第三手の持物は不明である。

②神将形像・竜：頭上に竜をあらわす。持物は不明である。

③神将形像：頭に獅子皮を被り，顎下で獅子の前脚を結ぶ。持物は不明である。本像は乾闥婆とみられるが，ここでは「獅子皮」と仮称する。

④鬼神形像：頭髪を炎髪とする。持物は不明である。

⑤・⑥・⑦の神将形像：いずれも細部の特徴は確認されない。

⑧阿修羅（その２）：阿修羅（その１）と同様である。

⑨神将形像・摩睺羅伽：頭に蛇を巻き付ける。持物は不明である。

⑩神将形像・迦楼羅：鳥頭人身で，面部に嘴と頬の肉垂をあらわす。持物は不明である。

⑪鬼神形像：頭髪は炎髪とし，頭に二角をはやす。持物は不明である。

⑫神将形像：頭に獣皮（不明）を被り，顎髭をはやす。持物は不明である。

⑬神将形像：頭に鹿皮をのせる。持物は不明である。以下，「鹿皮」と仮称を用いる。

⑭神将形像：細部の特徴は明確でない。

以上，第220窟北壁の七仏薬師浄土変において，八部衆とみられる尊像は合計14体で構成されている。特徴の明確でない神将像４体は四天王像である可能性もあるが，いずれにしても10体もしくは14体で構成されており12体ではない[6)]。

同じ第220窟の東壁には，入口の左右に維摩居士（東壁南側）と文殊菩薩（東壁北側）があらわされる。莫高窟・楡林窟では，このような維摩会の場面においても八部衆らしき集合尊があらわされることが多い。文殊菩薩の後方には，①～④像などが比丘像や菩薩像と共にあらわされる。

①阿修羅：三面六臂で左右第一手を合掌手とし，左右第二手は頭上で日輪・月輪を持つ。左第三手に折尺に似た形の鈎状持物，右第三手には天秤を持つ。

②神将形像・迦楼羅：鳥頭人身で面部に嘴をあらわす。持物は不明である。

③天部形像：髪を結い，頭に二角をはやす。顎髭を蓄えた老相とする。持物は不明である。

④鬼神形像：頭髪は炎髪とする。持物は不明である。

維摩居士側には，獣耳で炎髪の鬼神形像が確認される他は特徴が明確でない尊像が多い。

第340窟においては，主室西壁龕頂に宝塔の中に２体の仏坐像を横並びであらわし，その左右に４体ずつ配置する。向かって左側に①～④像，向かって右側に⑤～⑧像をあらわす。

①阿修羅：三面六臂で左右第一手は合掌手とせず，右手は胸前で第一・二指を相捻し，左手は腹前に置く。左右第二手は日輪・月輪を持つ。左右第三手の持物は不明である。

②神将形像・竜：頭頂に竜をあらわす。持物は不明である。

③天部形像：髪を結い，頭に一角をはやす。服制は詳細に確認されないが，おそらく着甲しない。経軌においては，頭に一角を有する緊那羅について触れるものもある[7)]。

④鬼神形像：頭髪は炎髪で，耳は先端の尖った獣耳とし，開口する。持物は不明である。

⑤神将形像・「獅子皮」：頭部に獅子皮を被り，顎下で獅子の前脚を結ぶ。持物は不明である。

⑥迦楼羅：鳥頭人身とし面部に嘴と頬の肉垂をあらわす。着甲像ではない。両手を胸前で合掌する。

⑦神将形像：右手に剣を持ち，忿怒の相をあらわにする。

⑧鬼神形像：頭髪を炎髪とし，腕に子供を抱える。

第334窟においては，主室西壁龕頂に仏説法図をあらわし，中央に施無畏･与願印を結ぶ仏坐像，左右に比丘像をあらわす。八部衆像は，仏坐像と比丘像の間に左右４体ずつ，上・中・下の三段構成で配されている。向

かって右側は上段に①像，中段に②像と③像，下段に④像，向かって左側は上段に⑤像，中段に⑥像と⑦像，下段に⑧像があらわされる。

①神将形像・「獅子皮」：頭部に獅子皮を被り，顎下で獅子の前脚を結ぶ。持物は不明である。

②神将形像・迦楼羅：鳥頭人身，面部に嘴と頬の肉垂をあらわす。持物は不明である。

③阿修羅：三面六臂で左右第一手は胸前で合掌手とする。左右第二手は日輪・月輪を持つ。左右第三手の持物は不明である。

④鬼神形像：頭髪を炎髪とし，手に宝珠を持つ。

⑤天部形像：頭頂に髻を結い，蓮華の蕾状の飾りを付ける。持物は不明である。

⑥神将形像：頭に象皮を被ると思われる。長い鼻と垂れ下がる耳が確認される。持物は不明である。

以下，本像は「象皮」と仮称を用いる。

⑦：剥落により細部は不明である。

⑧：剥落により細部は不明である。

第332窟においては，主室南壁の涅槃経変，西壁龕頂の二仏並坐の中に，それぞれ八部衆を構成する尊像が登場する。涅槃経変の中では，涅槃の場面には，仏足側（向かって右側）に①阿修羅と②摩睺羅伽の２体を，仏頭部側（向かって左側）に③「鹿皮」と④迦楼羅（鳥頭人身）の２体をあらわし，左右で合計４体からなる[8)]。荼毘に際して釈迦の身を清浄な衣で包む場面においては，最後方に阿修羅のみがあらわされる。また，同窟の西壁龕頂の二仏並坐像の左右に，阿修羅・「鹿皮」・摩睺羅伽など，計10体からなる八部衆像が配置されている。さらに，同窟の北壁の維摩会においても八部衆像があらわされている。維摩居士の後方に上下二段であらわされ，上段に①阿修羅，②合掌する神将形像，③竜，④「獅子皮」の４体，下段に⑤鳥頭人身の迦楼羅と⑥際だった特徴がない神将形像をあらわし，計６体で構成される。このように，第332窟における多数の場面に登場する八部衆像は，それぞれ神将形像の竜，摩睺羅伽，迦楼羅，「獅子皮」，「鹿皮」と阿修羅であり，比較的図像が固定されているといえる。また，八部衆が必ず８体で構成されるという規則性はなく，それぞれの画面のスペースに応じて数が変化している。

第335窟北壁の維摩会においても，維摩居士が坐す椅子のついたての後方には，三面六臂で左右第一手を合掌手とし，左右第二手に日輪・月輪を持つ阿修羅，頭頂にとぐろを巻く蛇をのせた神将形像の摩睺羅伽，左手に経巻を持つ天部形像，炎髪で先の尖った獣耳の鬼神形像などが確認される。

以上，莫高窟における初唐の八部衆像について確認してきた。莫高窟においては，八部衆を構成する尊像は，８体を一応の基本としながらも，規則性は弱く，画面のスペースに応じて尊像の数が変化している。また，仏説法図，涅槃図のみならず，維摩会などにおいても阿修羅，竜，摩睺羅伽，迦楼羅，「獅子皮」など八部衆としての図像的特徴を持つ尊像が登場している。

初唐窟における八部衆の阿修羅，竜，迦楼羅，摩睺羅伽，「獅子皮」などは，中国の四川省や韓国，さらに日本の八部衆においても共通して確認される図像である。特に第220窟東壁の維摩会における阿修羅像は左右第三手に天秤と鈎状持物を持つが，これは中国の四川省（初唐～晩唐），韓国（８世紀後半～10世紀前半）において確認される阿修羅の特徴の一つである。なお，莫高窟の八部衆の中にみられる「鹿皮」像については，これまでのところ，他地域の作例には確認されない。

**敦煌莫高窟　盛唐窟**

盛唐窟においては，第33窟，第320窟，第156窟，第172窟，第445窟などにあらわされる。

320窟南壁の阿弥陀浄土図では，中尊の左右にそれぞれ上下二段に比丘像･菩薩像とともに八部衆像が配置されている。秋山光和氏の報告にあるように[9]，本壁画は1923年～24年にかけてラングドン・ウォーナーにより切り取られ，現在はフォッグ美術館所蔵となっている。壁画は，中尊阿弥陀仏坐像の左右一カ所ずつが切り取られており，フォッグ美術館における登録番号1924－43と1924－44の壁画断片が320窟より切り出した断片にあたる。八部衆像の一部はこの切り取られた断片に含まれるものの，幸い現地において壁画を観察した際に各像の図像的特徴はたどることができた。秋山氏による報告書をあわせて確認したところ，中尊の向かって右側の上段に①～③像，下段に④像，向かって左側の上段に⑤～⑦像，下段に⑧像があらわされる。

①阿修羅：現状では三面で二臂のみが確認される。左手に三叉戟，右手に宝輪を持つ。

②神将形像・摩睺羅伽：頭部に蛇を巻き付ける。持物は不明である。

③神将形像：頭部に兜を被り，兜頂に鳥（鵞鳥か？）を付ける。持物は不明。以下，「鳥（鵞鳥？）」と仮称する。

④神将形像・「鹿皮」：頭頂に鹿の頭部をあらわす。持物は不明である。

⑤神将形像・竜：頭頂に竜をあらわす。持物は不明である。

⑥神将形像・「獅子皮」：頭部に獅子皮を被り，顎下で獅子の前脚を結ぶ。持物は不明である。

⑦神将形像・迦楼羅：鳥頭人身の像で，面部に嘴と頬の肉垂をあらわす。持物は不明である。

⑧鬼神形像：頭髪を炎髪とする。持物は不明である。

第445窟北壁の弥勒浄土図は一部に五代の重筆が加えられており，当初の状態は必ずしも明確ではない。画面向かって左側の上段に①像，下段に②～④像，画面向かって右側の上段に⑤像，下段に⑥～⑧像があらわされる。

①鬼神形像：左腕に子供を抱える。先の尖った獣耳で，頭髪を炎髪とする。

②「獅子皮」：頭部に獅子皮を被り，顎下で獅子の前脚を結ぶ。胸飾と天衣を付ける。

③摩睺羅伽（その１）：頭に蛇を巻き付け，首に蛇尾をあらわす。胸飾と天衣を付ける。

④頭頂に鳳凰をのせる像。胸飾と天衣を付ける。以下，「鳳凰」と仮称する。

⑤阿修羅：現状では三面四臂である。左右第一手を合掌手とし，左右第二手は日輪・月輪を持つ。

⑥神将形像・摩睺羅伽（その２）：蛇は頭頂で鎌首を立てる。持物は不明である。

⑦神将形像・竜：頭頂に竜をあらわす。持物は不明である。

⑧神将形像・迦楼羅：鳥頭人身の像で，面部に嘴をあらわす。持物は不明である。

以上の８体で構成されているが，蛇をモティーフとする摩睺羅伽が２体，鳥をモティーフとする像が２体など，同一モティーフの像が複数含まれている。

第33窟南壁の弥勒浄土図には，阿修羅，「鹿皮」，摩睺羅伽などがあらわされている。第33窟の阿修羅像は三面六臂で，左右第一手を合掌手とし，左右第二手は頭上で日輪・月輪を持ち，左第三手に鈎状持物，右第三手に金剛鈴（？）を持つ。

第148窟涅槃大仏窟においても，西壁全体に仏伝図を各画面ごとに区切って描かれている。阿修羅，竜，迦楼羅，「獅子皮」，摩睺羅伽，鬼神形像など，６体～８体が各場面に登場する。

第156窟西壁南側の騎象普賢においては，鳥頭人身の迦楼羅，竜などが，その他多数の槍･剣などを執る神将

形像とともにあらわされる。北側の騎獅文殊においては，琵琶を持つ「獅子皮」と頭に蛇を巻く鬼神形像などが，その他槍・剣などの武器を執る多数の神将形像とともにあらわされる。

その他，第172窟などにも八部衆に含まれる尊像の図像的特徴を有する像が確認される。

以上，盛唐の作例を確認してきた。盛唐窟においても，浄土図，仏説法図，維摩会とともに，騎象普賢・騎獅文殊にそれぞれ付き従う群衆の中に，八部衆らしき図像を持つ尊像をしばしば確認することができる。また，このような群像の中に，阿修羅像が含まれていないこともある。

なお，初唐において阿修羅像が同一の壁面に複数登場していたように，盛唐以降は阿修羅，鳥をモティーフとする像，蛇をモティーフとする像なども複数含まれていることがある。着甲神将形像の鳥をモティーフとする図像の中に，「鳳凰」，「鳥（鵞鳥？）」など，鳥頭人身の図像だけではなく鳳凰などを頭にのせる図像が新たに確認された。摩睺羅伽においても，首に蛇を巻き付ける場合と，頭上で鎌首を立てた蛇によってあらわす場合とが確認された。これは，同一の壁面に鳥や蛇などの同じモティーフを伴う像を複数登場させる場合に，それぞれのモティーフの扱いに変化が付けられたものと思われる。また，鬼神形像においても，腕に子供を抱える鬼神形像など，炎髪の通形の鬼神形像においても特定の図像によるものと想定される鬼神形像が確認されるようになる。

**敦煌莫高窟　中唐窟**

中唐窟においては，第231窟，第158窟，第129窟などにあらわされている。

第231窟の南壁東側には，楼閣表現を背景とした仏三尊からなる浄土図が描かれている。剥落や補筆等により確認が困難な箇所もあるが，本画面の向かって左側（右脇侍菩薩の後方）の上段に①像，下段に②～④像，向かって右側（左脇侍菩薩の後方）の上段に⑤像，下段に⑥～⑧像があらわされる。

①阿修羅：三面四臂であり，左右第一手は合掌手とするようである。左右第二手に日輪・月輪を持つ。

②神将形像・迦楼羅：鳥頭人身とし面部に嘴をあらわす。胸前で合掌する。

③神将形像・「鳥（鵞鳥？）」：頭頂に鳥をのせる。胸前で合掌する。

④神将形像・摩睺羅伽：頭に蛇を巻く。胸前で合掌する。

⑤鬼神形像：腕に子供を抱く。頭髪を炎髪とする。

⑥神将形像・竜：頭頂に竜をあらわす。胸前で合掌する。

⑦神将形像・「獅子皮」：頭部に獅子皮を被り，顎下で獅子の前脚を結ぶ。両手で琵琶を持つ。

⑧像：状態が悪く，詳細は明らかにされない。

第158窟においては，仏涅槃像を主尊とし，西壁に仏の涅槃の場に集う様々な生衆が描かれている。西壁北側隅に比丘像，四天王像に次いで八部衆像を配置する。いずれも頭部のみであらわされ，持物は表現されていない。

①神将形像・竜：頭頂に竜をあらわす。

②神将形像：頭上にマカラをあらわす。以下，「マカラ」と仮称する。

③神将形像・「鳥（鵞鳥？）」：頭上に鳥（鵞鳥か？）をあらわす。

④阿修羅：三面三目四臂で，左右第一手は胸前に置いて法螺貝を挟み持つ。左右第二手は日輪・月輪を持つ。

⑤神将形像・摩睺羅伽：頭上に蛇をあらわす。頭に蛇を巻き付ける表現はとらない。

⑥神将形像・「鹿皮」：頭上に鹿をあらわす。

⑦神将形像・「鳳凰」：頭上に鳳凰をあらわす。
⑧鬼神形像：頭髪を炎髪とし，頭頂に一角を生やす。腕に子供を抱える。
⑨老相人物：冠に「匡」の字をあらわす。
⑩神将形像・「獅子皮」：頭部に獅子皮を被り，顎下で獅子の前脚を結ぶ。
⑪老相人物：頭巾を被り顎髭を蓄える。

２体の老相人物は八部衆ではなく，その他の神格の可能性もある。

第129窟北壁の弥勒浄土図は，中央の仏倚像・二菩薩倚像を中心とした仏・菩薩・四天王像の集団，画面左下の菩薩倚像を中心とした菩薩・比丘・力士像の集団，画面右下の菩薩倚像を中心とした菩薩・比丘・力士像の集団によって画面が構成されている。画面左下の集団の最後方に，いずれも神将形像の①「鳳凰」，②竜，③「鹿皮」，④摩睺羅伽の４体があらわされている。画面右下の集団の最後方に，⑤阿修羅，⑥神将形像「獅子皮」，⑦神将形像（剥落により詳細は不明），⑧神将形像（剥落により詳細は不明）の４体があらわされており，左右で合計８体からなる。各像はいずれも第158窟の図像と共通する。

第159窟[10]，第231窟[11]，第237窟など，騎象普賢・騎獅文殊の中に，八部衆らしき尊像が登場する。第237窟においては，西壁南側の騎象普賢の後方に①～⑤像，北側の騎獅文殊の後方に⑥～⑩像がいずれも多数の菩薩形像と共にあらわされている。

①鬼神形像：頭髪を炎髪とし，頭に一角をはやす。持物は不明である。
②神将形像・摩睺羅伽：頭上に蛇をあらわし，右肩に蛇尾を垂らす。持物は不明である。
③神将形像・「マカラ」：頭上にマカラをあらわす。右手に剣を執る。
④神将形像・竜：頭上に竜をあらわす。胸前で合掌する。
⑤阿修羅：三面五目四臂で，左右第一手を合掌手とし，左右第二手に日輪・月輪を持つ。
⑥鬼神形像：頭髪を炎髪とし，頭に二角をはやす。左手に三叉戟を持つ。
⑦神将形像・「鳳凰」：頭上に鳳凰をあらわす。剣を執るようである。
⑧神将形像・「獅子皮」：頭部に獅子皮を被り，顎下で獅子の前脚を結ぶ。胸前で両手を重ねる。
⑨神将形像：兜を被り，兜頂に孔雀の羽飾を付ける。鳥頭の飾りが付いた斧を持つ。本稿において，この持物は鳥頭斧と称する。
⑩神将形像:顎髭を蓄え，頭部に何かの獣皮（不明）を被るが，剥落により明確ではない。持物は不明である。

この中で，阿修羅が本面に第三眼をあらわす点，四臂となる点でこれまでの阿修羅像と大きく異なっている。中唐以降，莫高窟および楡林窟において，阿修羅の本面に第三眼があらわされることが多く，中には五眼のものもある。また，四臂の阿修羅像は，中唐以降の莫高窟および楡林窟の阿修羅像において一つの形式となる。持物に関しては，第158窟の阿修羅が法螺貝を持ち，これは盛唐までの阿修羅像には確認されない。対して，初唐・盛唐の阿修羅像が持物としていた宝輪，天秤，鈎状持物，金剛鈴（？）などは，中唐以降の阿修羅像には確認されなくなる。このように，特に阿修羅像について，盛唐までの阿修羅像と中唐以降の阿修羅像の間に図像に変化が著しい。

中唐においては，獣皮をともなう神将像の図像にマカラが加わり，これまで以上に獣皮をともなう図像が多用されている。獣皮の中には「獅子皮」，「鹿皮」，「象皮」，「マカラ」などがあり，一つの画面に複数の獣皮をともなう着甲神将形像が登場することも多い。また，初唐・盛唐の造像においてはわずかながら天部形像が確認されたが，中唐以降は阿修羅を除くすべてが着甲神将形像と鬼神形像で構成されることが多くなる。しかし，

阿修羅を除いては，いずれの図像も初唐・盛唐において確認された図像を引き続き用いており，際だった図像変化は見出せない。

**敦煌莫高窟　晩唐～五代窟**

既刊の図版，報告書等により，莫高窟の晩唐～五代窟では第６窟，第９窟，第16窟，第32窟，第36窟，第61窟，第98窟，第138窟などに八部衆像があらわされることが知られている。しかし，今回は調査時間の制約により，晩唐～五代窟に関しては以下の二窟のみの調査に留まらざるを得なかった。今後，改めて詳細な調査が行われることを期待し，本稿においては第６窟，第９窟の八部衆像についてのみ触れたい。

第６窟では，西壁龕内の南・北壁に８体の菩薩像とともに八部衆像があらわされる。龕内南壁の上段に①～③像，中段に④像，下段に⑤・⑥像，龕内北壁の上段に⑦～⑨像，下段に⑩・⑪像があらわされている。なお，本窟の八部衆像には，一律ではないが，題箋状の尊名の書込が設けられている。しかし，この尊名の書込は後世の筆によるものと思われ，また，蛇を巻く神将形像（摩睺羅伽）に対して「迦楼羅」という尊名が与えられているなど，信用できるものでない[12)]。

①阿修羅：三面三目四臂で，左右第一手を合掌手とせずに垂飾が懸かった三叉戟を持つ。三叉戟の持ち方については，不明である。左右第二手に日輪・月輪を持つ。

②神将形像・摩睺羅伽（その１）：頭頂に蛇をあらわさず，首に巻き付けるようにあらわす。持物は不明である。

③神将形像・「マカラ」：頭上にマカラをあらわす。右手に剣を執る。

④鬼神形像：額に第三眼をあらわし，頭髪を炎髪とする。

⑤神将形像・「鳳凰」：頭に鳳凰をのせる。弓矢を持つ。

⑥神将形像：兜を被り，左手に鳥頭斧を持つ。

⑦鬼神形像：頭髪を炎髪とし，持物は不明である。

⑧神将形像・「獅子皮」：頭部に獅子皮を被り，顎下で獅子の前脚を結ぶ。持物は不明である。

⑨神将形像・摩睺羅伽（その２）：蛇は頭上で鎌首を立てる。右手に剣を執る。

⑩神将形像・「鹿皮」：頭上に鹿皮をあらわす。左手を上，右手を下にして両手で剣を執る。

⑪神将形像・竜：頭上に竜をあらわす。顎髭を蓄える。左手に鳥頭斧を持つ。

第９窟東壁南側の騎象普賢，東壁北側の騎獅文殊においても八部衆とみられる尊像が確認される。騎獅文殊の後方に①～⑦像，騎象普賢の後方に⑧～⑬像があらわされる。

①鬼神形像：頭髪を炎髪とする。身色は現状で赤褐色である。

②鬼神形像：頭髪を炎髪とする。身色は現状で肉色である。

③阿修羅：三面三目四臂で左右第一手を合掌手とし，左右第二手に日輪・月輪を持つ。

④神将形像・「獅子皮」：頭部に獅子皮を被り，顎下で獅子の前脚を結ぶ。右手は第一・二指を相捻する。

⑤神将形像：口髭を蓄え，右手に剣を執る。

⑥神将形像・摩睺羅伽（その１）：肩から頭頂に蛇をあらわし，右手で蛇尾を握る。左手は棒状の持物を執る。

⑦神将形像・竜（その１）：頭上に竜をあらわす。右手に剣を執る。

⑧神将形像・「マカラ」：頭上にマカラをあらわす。持物は不明である。

⑨神将形像・「獅子皮」：頭部に獅子皮を被り，顎下で獅子の前脚を結ぶ。持物は不明である。

⑩神将形像：両手で剣を執る。
⑪神将形像・「鳳凰」：兜を被り，兜頂に鳳凰をあらわす。持物は不明である。
⑫神将形像・摩睺羅伽（その２）：首に蛇を巻き付け，右手で蛇尾を握る。
⑬神将形像・竜（その２）：竜（その１）と同様である。

晩唐以降においては，莫高窟第６窟や後述の楡林窟第16窟などにみられるように，両石窟における晩唐～五代の造像では八部衆像が描かれる壁面に主尊となる仏・菩薩を登場させない構図がしばしば登場する。第６窟では，主尊は龕内に塑像で安置され，南・北壁に随従する菩薩形像と八部衆像が描かれている。さらに楡林窟第12窟では主尊となる仏・菩薩を伴わずに前室の南・北壁にあらわされる。このような窟内における八部衆像の配置により，莫高窟および楡林窟において八部衆像が守門・守護の役割を帯びていた可能性がうかがえる。また，東壁入口左右や，西壁龕口左右にあらわされる騎象普賢と騎獅文殊は，窟内の主尊の種類に関係なく一対であらわされており，必ずしも釈迦仏もしくは毘盧遮那仏の脇侍としての騎象普賢・騎獅文殊ではない。門口の左右に一対であらわすことにより，守護的な役割を担っているとも考えられている。莫高窟に限らず，四川省の資中重竜山第128龕（晩唐），邛崍盤陀寺石窟阿弥陀仏三尊龕（晩唐）[13] などにも類例が見出される。このように，窟内の守護の役割を担うと思われる騎象普賢・騎獅文殊に付随することで，八部衆像も仏・菩薩に対する守護の眷属であるとともに，窟全体・龕全体を守護する役割を担う尊像と認識されていた側面も強かったと思われる。

**安西楡林窟　晩唐窟～五代窟**

楡林窟についても，調査日数の制約と西崖の壁岩の補強工事のため，確認することができなかった窟が多数ある。以下，調査におよんだ窟において確認された八部衆像のみを報告する。

第25窟（晩唐）主室北壁の弥勒浄土図は，一部に画面の剥落があり，確認が難しい箇所もある。画面の向かって左側に①～④像，向かって右側に⑤～⑧像をあらわす。
①神将形像・「鳳凰」：頭上に鳳凰をあらわす。持物は不明である。
②神将形像・「獅子皮」：頭部に獅子皮を被り，顎下で獅子の前脚を結ぶ。持物は不明である。
③神将形像・摩睺羅伽：肩から頭部にかけて蛇をあらわし，頭上で鎌首を立てる。持物は不明である。
④鬼神形像：頭髪を炎髪とする。右手に棍棒を持つ。
⑤神将形像・竜：頭上に竜をあらわす。顎髭を蓄える。左手に先端を欠する棒状持物を持つ。
⑥神将形像・「マカラ」：頭上にマカラをあらわす。持物は不明である。
⑦神将形像・「孔雀」：剥落のため，細部まで明確にされないが，兜を被り兜上に孔雀をのせる，もしくは孔雀の羽根飾が付いた兜を被ると思われる。持物は不明である。
⑧鬼神形像：大きく開口する。頭部鼻より上は剥落により確認できない。傘状の飾りが付いた槍を持つ。

以上，左右で合計８体からなる八部衆像であるが，鬼神形像が２体含まれており，阿修羅と鳥頭人身の迦楼羅が含まれていない。神将形像の竜，摩睺羅伽，「獅子皮」，「鳳凰」などは，いずれも莫高窟において確認された図像と同一である。

第12窟（五代）においては主室の南･北壁に，八部衆像とみられる像が確認される。南壁の上段に①～④像，下段に⑤～⑧像，北壁の上段に⑨像と⑩像，下段に⑪～⑭像などがあらわされる。
①鬼神形像：頭髪は髻を結い，牛骨やその他の動物の頭骨が正面に付いた頭飾を付ける。両手にもそれぞれ頭

骨を持つ。

②神将形像・「獅子皮」：頭部に獅子皮を被り，顎下で獅子の前脚を結ぶ。持物は不明である。

③迦楼羅：鳥頭人身とし，頭部に鶏冠，嘴，頬の肉垂をあらわす。着甲像ではない。

④阿修羅（その１）：三面四臂で左右第一手を合掌手とし，左右第二手に日輪・月輪を持つ。

⑤鬼神形像：頭髪を炎髪とする。持物は不明である。

⑥神将形像・「鳳凰」：兜を被り，兜上に鳳凰をあらわす。垂飾が懸かった三叉戟を持つ。

⑦神将形像・「鹿皮」：頭上に鹿をあらわす。右手に剣を執る。

⑧神将形像・「象皮」：頭部に象頭皮を被る。右手に鳥頭斧を持つ。

⑨阿修羅（その２）：三面三目であるが臂数は確認できない。日輪・月輪を持つ手のみがあらわされている。

⑩鬼神形像：頭髪を炎髪とし，両手で蛇を握る。

⑪神将形像・竜：頭上に竜をあらわす。左手で竜脚を握り，右手に剣を執る。

⑫神将形像・「孔雀」：頭上に孔雀をあらわす。右手に鳥頭斧を持つ。

⑬神将形像・摩睺羅伽：肩から頭上にかけて蛇をあらわす。左手で蛇尾を握り，右手に宝棒を持つ。

⑭神将形像・「マカラ」：頭上にマカラをあらわす。右手に剣を執る。

この他に，北壁には蛇が巻き付く三叉戟，棍棒，剣，槍などを持つ鬼神形像が６体あらわされている。

第12窟においては，前室南・北壁にも八部衆像が確認される。南壁の上段に①～③像，下段に④～⑦像が菩薩像が４体，俗形の婦女像１体とともにあらわされる。北壁の上段に⑧像と⑨像，下段に⑩～⑬像が４体の菩薩像とともにあらわされる。

①鬼神形像：頭髪を炎髪とする。持物は不明である。

②阿修羅（その１）：三面三目四臂で左右第一手を合掌手とし，左右第二手に日輪・月輪を持つ。

③神将形像：明確な特徴を持たない通常の神将像である。

④鬼神形像：頭髪を炎髪とする。持物は不明である。

⑤神将形像：兜頂に孔雀の羽根飾を付け，垂飾の懸かった三叉戟を持つ。

⑥神将形像：明確な特徴を持たない通常の神将像で，右手に剣を持つ。

⑦神将形像・摩睺羅伽（その１）：首に蛇を巻き付け，左手で蛇尾を握る。

⑧阿修羅（その２）：阿修羅（その１）と同様である。

⑨神将形像：明確な特徴を持たない通常の神将像である。

⑩鬼神形像：頭髪を炎髪とする。持物は不明である。

⑪神将形像：兜頂に孔雀の羽根飾を付け，右手に剣を執る。

⑫神将形像：明確な特徴を持たない通常の神将像で，右手に鳥頭斧を持つ。

⑬神将形像・摩睺羅伽（その２）：肩から頭頂にかけて蛇をあらわし，蛇は頭上で鎌首を立てる。左手は蛇尾を握り，右手は宝棒を持つ。

なお，⑤，⑥，⑪，⑫の神将形像にはそれぞれ題箋状の書込が設けられている。⑤像に「南無西方」，⑥像に「南無北方」とあり，⑪像と⑫像は判読できない。この４体の神将形像は四天王ともみられる。

第16窟（五代）においても，同様に前室の南北壁に八部衆像があらわされている。南壁の上段に①像，下段に②～⑤像，北壁の上段に⑥像，下段に⑦～⑩像があらわされる。

①阿修羅（その１）：三面三目四臂で左右第一手を合掌手とし，左右第二手に日輪・月輪を持つ。

②神将形像・竜（その１）：頭上に竜をあらわし，右手に鳥頭斧を持つ。
③神将形像・摩睺羅伽（その１）：頭上に蛇をあらわし，右手に剣を執る。
④神将形像・「鳳凰」：兜を被り，兜頂に鳳凰をあらわし，右手に剣を執る。
⑤神将形像：髪を双髻に結い，右手に宝棒を持つ。
⑥阿修羅（その２）：三面三目四臂で左右第一手は胸前に置き，両手で法螺貝を挟み持つ。左右第二手は日輪・月輪を持つ。
⑦神将形像・竜（その２）：頭上に竜をあらわし，右手に剣を執る。
⑧神将形像・摩睺羅伽（その２）：肩から頭上にかけて蛇をあらわし，左手に蛇尾を握る。
⑨神将形像・「獅子皮」：頭部に獅子皮を被り，顎下で獅子の前脚を結ぶ。持物は不明である。
⑩神将形像・「孔雀」：頭頂に孔雀をあらわし，両手で弓矢を持つ。

楡林窟における晩唐～五代窟にみられる八部衆像の展開として，これまでのように主室に配置される場合もあるが，第12窟，第16窟のように前室の南北壁に八部衆像が描かれ，中尊を伴わずに配置されることがある。これらは，守門神的な役割を期待されてこの位置に配置されたものと思われる。同様に，主室へ至る前室の左・右壁に八部衆像を配置する例は，韓国の慶州石窟庵においても確認される[14]。

## ２．尊像別の図像について

次に，莫高窟および楡林窟の八部衆の各像について，(1)着甲神将像形，(2)鬼神形像，(3)多面多臂形像（阿修羅），(4)天部形像，の順に尊像別に確認して行きたい。

### (1) 着甲神将像形

莫高窟・楡林窟における八部衆像は，その大半が着甲する神将形像としてあらわされ，(a) 竜を伴うもの，(b) 蛇を伴うもの，(c) 獣皮を被るもの，(d) 鳥のモティーフを伴うもの，に大別される。

肩から頭上にかけて竜をあらわす像は，その図像的特徴から竜とされる。持物は，剣，槍，鳥頭斧などが確認される。竜脚を握る場合もある。剣を持物とする竜は，中国の四川省や韓国にも共通して確認される図像である。

肩・首から頭上にかけて大蛇を巻き付けるようにあらわす像は，その図像的特徴から摩睺羅伽とされる。持物として剣や宝棒などを執り，蛇尾を握る場合もある。韓国の八部衆像においても蛇尾を握り剣を執る摩睺羅伽が確認される。なお，莫高窟および楡林窟では，晩唐以降の窟において，しばしば摩睺羅伽が２体以上あらわされることがあり，その場合，一体では蛇は頭上に鎌首を立て，もう一体は蛇を首に巻き付けるなど，蛇の表現に変化が付けられている。

莫高窟・楡林窟では，頭に様々な獣皮を被る尊像が多数確認された。それぞれ仮称を用いて，①「獅子皮」，②「鹿皮」，③「象皮」，④「マカラ」とする。

「獅子皮」像も，八部衆像における代表的な図像の一つである。莫高窟・楡林窟の「獅子皮」像はいずれも着甲像で，獅子の前脚を顎下で結ぶもしくは交差させるものが多く，持物をあらわさな場合が多いが，莫高窟第156窟（盛唐）と第231窟（中唐）では琵琶を持ち，第172窟（晩唐）では槍を持つ。一方，四川省の「獅子皮」像において着甲するものはごくわずかであり，通常は胸前で打合せのある大袖の衣を着ており，獅子の前脚は肩の後方に垂らし，省略されることが多い。持物をあらわさない場合が多いが，広元皇沢寺大仏窟の「獅子皮」像は剣を執り，丹稜の鄭山・劉嘴の「獅子皮」像は箱状の持物を持つ。

「獅子皮」は乾闥婆とも思われるが，なお検討の余地がある。八部衆における乾闥婆が獅子皮を被ることを規定した経軌はなく，獣皮を被るということが図像において重要な点であるのか，また獅子皮でなければならないのか，現段階においては明確な回答を見出していない。韓国における「獅子皮」像は楽器を持物とするため，楽神としての乾闥婆の可能性が高い。また，莫高窟第156窟，第231窟の像が琵琶を持つため，莫高窟においても，「獅子皮」像について楽神乾闥婆としての認識が必ずしもなかったとはいえない。しかし，莫高窟・楡林窟の「獅子皮」像の持物は多くが不明であり，また，「獅子皮」の図像は四天王像の従者など八部衆以外の像としても登場するため，この地域における「獅子皮」像をすべて乾闥婆に断定することは躊躇したい。

「鹿皮」は，「獅子皮」と並び莫高窟・楡林窟の八部衆において頻出する図像である。初唐からすでに確認される。持物として，莫高窟第６窟（五代），楡林窟第12窟（五代）では剣を持つ像が確認される。なお，「鹿皮」は莫高窟・楡林窟以外の八部衆像においてはあらわされず，全く地域的な図像といえる。不空訳『摂無礙経』（８世紀後半）において「緊那羅王身。身相赤肉色。麞鹿馬頭面。執持音声器。人身裸形相。」[15] とあり，馬や鹿の頭部や面部と人身を組み合わせることにより，「人非人」と同一とされる[16] 緊那羅をあらわそうとする傾向もあり，本像は緊那羅である可能性も検討されよう。

「マカラ」，「象皮」についても尊名は不定である。マカラは体を大魚，頭と下顎をワニ，鼻を象のような長い鼻とする伝説上の海獣である。両者は図像的に混同されたケースも考えられ，伝説上の海獣マカラと象の形象とを混同する例もしばしばあろう。マカラを被る着甲神将像は台北故宮博物院所蔵『張勝温画大理国梵像』(1133年）においても確認され，象皮を被る像は日本の興福寺国宝館に所蔵される脱活乾漆造八部衆像の中にも確認される。

なお，以上のような獣皮を被る尊像は，莫高窟・楡林窟においては八部衆像に限らず確認される。莫高窟第98窟，楡林窟第25窟，第15窟などにおいては，天王像の眷属として鬼神形像とともに獅子皮を被る像，虎皮を被る像などがあらわされている。

鳥をモティーフとする図像は，⑴人身鳥頭で嘴・頬の肉垂をあらわす像，⑵頭上に鳥（鵞鳥？）をあらわす通形の神将像（「鳥（鵞鳥？）」と仮称），⑶頭上に鳳凰をあらわす通形の神将像（「鳳凰」と仮称），⑷頭上に孔雀をあらわす通形の神将像（「孔雀」と仮称），からなる。初唐の作例など，初期の作例では⑴のみが確認される場合が多い。このような嘴・鶏冠・頬の肉垂をあらわす鳥頭の迦楼羅像は，四川省および韓国，日本の八部衆像においても多数認められる図像である。盛唐時代以降，⑴のような鳥頭でない⑵～⑷の像が登場する。第320窟（盛唐）には，⑴の鳥頭像と⑵「鳥（鵞鳥？）」があらわされ，第158窟（中唐）には⑵「鳥（鵞鳥？）」と⑶「鳳凰」とがあらわされているが，このような鳥のモティーフを伴う像に限らず，阿修羅，摩睺羅伽，竜においても，一つの八部衆の中に同種の尊像が複数含まれることは多い。この場合，例えば摩睺羅伽では蛇の巻き付け方を異にし，阿修羅では左右第一手を合掌手とするものと法螺貝を持つものとするなど，細部の表現と持物にわずかながら変化を付けていることもある。鳥のモティーフを伴う複数の図像は，迦楼羅を複数あらわすに際して生じたものとも思われる。いずれにしても，四川省や韓国の迦楼羅像が，⑴人身鳥頭で嘴をあらわす図像が主流である点で，莫高窟・楡林窟において展開した迦楼羅像の図像とは大きく異なっている[17]。

### ⑵ 鬼神形像

上半身裸形で忿怒の相をあらわにし，炎髪・巻髪の鬼神形であらわされる像には，①蛇を腕に巻き付ける，もしくは両手で持つ，②腕に子供を抱える，③棍棒を持つ，④槍（蛇が巻き付くものもある）を持つ，⑤剣（蛇が巻き付くものもある）を持つ，⑥三叉戟（蛇が巻き付くものもある）を持つ，⑦牛骨やその他の頭骨を

装飾品として用いる，などの図像がある。持物が確認されない場合も多い。棍棒は鬼神形像が一般的に持つ持物の一つであり，四川省でも丹稜鄭山・劉嘴などに確認された。剣も，広元皇沢寺大仏窟に剣らしき持物を持つ鬼神形像が確認される。腕に童子を抱える炎髪の鬼神形像（角の有・無を含む）は，四川省においても盛唐窟以降に確認されるようになる。

莫高窟および楡林窟の八部衆像には複数の鬼神形像が含まれる例も少なくない。それに対し，四川省の八部衆には通常１体の鬼神形像があらわされ，韓国の石塔に浮彫りされる八部衆像には鬼神形像が含まれずに阿修羅像１体と着甲する神将形像７体で構成される。このように，莫高窟と楡林窟の八部衆の構成において，鬼神形像の需要が高かったことがうかがえる。

子供を抱く鬼神形像について，中央アジアのキジル石窟第80窟などにおいて確認されるアータヴィカ・ヤクシャの図像との関連もうかがえる。しかし，四川省の八部衆像の中にも子供を抱く鬼神形像が登場することから，必ずしも中央アジアの地域的伝統の中においてのみで形成された鬼神形の図像ではない。中原地域においては，河南省鞏県石窟第１窟，第３窟，第５窟，竜門石窟賓陽中洞においてみられるように，八部衆が成立する以前に石窟の守護神としてあらわされていた数々の「神王像」の中には，腕に子供を抱く鬼子母神が含まれている。鬼子母神は，護世八方天，十方天，十二天など最終的に完成された護世神の構成においてはその名を見出すことはできないが，その初期段階において護世神の一員として名を連ねることも多い[18]。子供を抱く鬼神形像の図像も，護世神の中の図像の一つという認識があったと思われる。

莫高窟および楡林窟では，多くの鬼神形像が蛇を持つ，もしくは蛇とともに棍棒・剣などを持つ。キジル石窟第198窟（悪魔窟C），第175窟（誘惑窟）および莫高窟第254窟（西魏）前室南壁の降魔成道において，象頭，獅子頭，虎頭，馬頭など獣頭人身の魔衆が登場する。この魔衆も，胸飾・臂釧・腕釧として蛇を巻き付けたりしており，蛇は鬼神全般に付随するモティーフの一つであったといえる。その点で，摩睺羅伽の図像特徴としての大蛇とは一線を画すものである。

### (3) 多面多臂形像（阿修羅）

莫高窟および楡林窟の阿修羅像が持つ持物として，法螺貝，宝輪，鈎状持物，天秤，金剛鈴，垂飾が懸かった三叉戟，日輪・月輪があげられる。日輪・月輪は，インドや東南アジアにおけるアスラ（阿修羅）像には確認されず，中国，韓国，日本の阿修羅像において確認される持物である。これは，インドや東南アジア世界におけるアスラと，中国以東の阿修羅との間に，それぞれの阿修羅に付随するイメージの変化が生じたためと考えている。阿修羅のみならず，中国の多臂観音像の中には日輪・月輪を持つものが多数確認されることから，持物としての日輪・月輪は中国的な流行とも思われる。

初唐の第220窟の阿修羅像は，左右第三手に鈎状持物と天秤をセットで持つ。このように天秤と鈎状持物をセットで持つ阿修羅の図像は，中原地域においては竜門石窟賓陽北洞の阿修羅像（初唐），四川省では広元皇沢寺大仏窟（初唐），丹稜鄭山第61龕（754年），巴中南龕第73龕（晩唐）をはじめとする多数の阿修羅像に確認され，さらに韓国の統一新羅後期から高麗前期（８世紀後半～10世紀前半）における石塔に浮彫りされた八部衆の中の阿修羅像に多数確認される[19]。

また，盛唐の第33窟の阿修羅像は右第三手に金剛鈴（？）を持つが，同様の持物は四川省では蒲江飛仙閣第９号龕の阿修羅像に確認される。しかし，第33窟の阿修羅像が左右第三手に金剛鈴（？）と鈎状持物をセットで持つのに対し，飛仙閣第９号龕の阿修羅像は左右第三手に金剛鈴（？）と天秤をセットで持つ点で異なる。盛唐の第320窟の阿修羅像は宝輪を持物とするが，宝輪を持物とする阿修羅像も四川省の初唐から晩唐の作例，

韓国では慶州石窟庵の八部衆の阿修羅像に確認される[20]。

このように，莫高窟の初唐窟から盛唐における阿修羅像は，中国の他地域および韓国の作例と同一の図像が確認される。さらに，後述のように莫高窟において初唐以前に造られていた八部衆ではない阿修羅像の図像とは明らかに異なることから，八部衆における阿修羅の図像が，八部衆という尊像の枠組みとともに，初唐において中原地域からもたらされたと推測されるであろう。そして，莫高窟の盛唐窟においては，他地域と共通する持物が依然として確認されるが，その持ち方に変化があらわされるなど，次第に独自の変化をたどった時期であったと思われる。

また，莫高窟および楡林窟の阿修羅像において，初唐および盛唐の阿修羅像は三面六臂が大半を占めており，これは中国の他地域および韓国や日本の阿修羅像とも共通する。しかし，中唐以降は三面四臂の阿修羅像が大半を占める。左右第一手を合掌手とし，左右第二手に日輪･月輪を持つ，もしくは左右第一手に法螺貝を持つ。これは，初唐・盛唐までの阿修羅像を簡略化し，莫高窟・楡林窟における阿修羅の図像の形式化の一側面を成しているとともに，この地域において伝統的に用いられていた阿修羅の図像への回帰とも考えられる。莫高窟において八部衆が造像される以前にも阿修羅像は多数造像されており，例えば，莫高窟第249窟（西魏）西北隅天井にあらわされた須弥山の前に立つ阿修羅像は四臂であり，左右第一手を合掌手とせず，左右第二手は頭上にあげて日輪・月輪を持つ。第428窟(北周)，第420窟（隋）においてもほぼ同じ図像である。莫高窟においては，このような八部衆ではない阿修羅の図像と初唐以降の八部衆としての阿修羅の図像とは共通しない要素が多い。莫高窟と楡林窟の中唐以降の四臂の阿修羅像は，この地域における八部衆以前の阿修羅の図像を再び取り入れたものといえるであろう。初唐・盛唐における八部衆の阿修羅像は，中原地域，四川省および韓国など他地域の八部衆の阿修羅像との図像的関連が想定されるものであったが，莫高窟の中唐以降の八部衆は，むしろ他地域とのつながり以上に，獣皮をまとう神将形像および鬼神形像に関しても同様に，地域的側面への傾倒がうかがえる。

なお，莫高窟および楡林窟の中唐以降の窟においては，阿修羅像を含まずに八部衆を構成する場合がしばしば確認された。阿修羅は八部衆の中でも最も代表的な尊像といえ，中原地域，四川省，韓国，日本の八部衆においては必ず登場する。それに対し，莫高窟・楡林窟においては，阿修羅が配置される場所が多数の尊像の中で最も後方になるなど，阿修羅をあまり重要視しない傾向がうかがえる。これは，莫高窟・楡林窟の八部衆像が守門神・守護神としての側面を強く帯びていたことに起因しているとも思われるが，しかし，そのような役割を果たす八部衆像において，なぜ阿修羅が外されなければならなかったであろうか。おそらく，後述のように，莫高窟および楡林窟において地域的・伝統的に造像されていた獣皮をまとう鬼神形像による守護・守門の集合尊の影響が，この地において八部衆が定着し，土着化する過程で，再び影響を強めたためとも推測される。

### ⑷ 天部形像

莫高窟および楡林窟の八部衆像において，天部形像は極めて少ない。第340窟などの初唐窟においては，迦楼羅，摩睺羅伽なども胸飾を付けて天衣をまとう姿であらわされており，必ずしも着甲神将形像のみではなかった。同じく初唐の第332窟では蓮華の蕾状の飾りを付けた天部形像，第340窟では頭飾正面に一角をはやす天部形像,第220窟東壁では二角をはやす老相の天部形像が八部衆の中に含まれており,莫高窟の初唐窟においては，少数ながらも，八部衆として天部形像が含まれていた。また，着甲しない迦楼羅や摩睺羅伽などの尊像も確認された。しかし，次第に天部形像はあらわされなくなり，神将形像と鬼神形像によって八部衆が構成されるようになる。そのため，四川省の八部衆像に対し，莫高窟では天部形像の図像が極めて少ない。別稿で述べたよ

うに，四川省の八部衆像の中には，二または三の山形の縁飾りが付いた団扇を執る天部形像，頭に一角を有する天部形像，胸まで垂れる長い耳朶を持つ天部形像など，特徴的な図像を有する天部形像が多く確認された。そして，四川省の八部衆に確認される獣皮を伴う像は「獅子皮」のみであった。

### 3．莫高窟および楡林窟における八部衆像の展開

ここで，この地域における八部衆像全体を通して確認される特徴と，時代的展開を確認しておこう。

莫高窟および楡林窟において，八部衆は釈迦をはじめ阿弥陀，薬師，弥勒などの仏説法図，浄土図に登場するだけではなく，維摩会や騎象普賢・騎獅文殊においてもあらわされていた。また，八部衆を構成する尊像の数は基本的には８体としながらも，その規則性は弱く，スペースに応じて数を変化させている。

莫高窟･楡林窟の八部衆像は着甲神将形像が圧倒的に多く，竜，摩睺羅伽，「獅子皮」，「鹿皮」，「象皮」，「マカラ」，迦楼羅（鳥頭人身）「鳳凰」，「鵞鳥」，「孔雀」など，大半が着甲し武器を執る着甲の神将形像としてあらわされている。また，鬼神形像が頻出し，特に中唐以降では同一の壁面の八部衆の中に，多数の鬼神形像が含まれるようになる。なお，着甲神将形像の中で，頭部に鹿皮を被る「鹿皮」像は莫高窟・楡林窟にのみ頻出する図像である。

さらに，阿修羅，摩睺羅伽，竜，迦楼羅など，同一のモティーフを伴う尊像が複数あらわされる場合もある。この点に関しては次のような解釈も可能であろう。おそらく,左右で別の八部衆の群像を配置したものであり，それぞれの八部衆は必ずしも８体で構成されるわけではないため，片側に４体，6体，もしくは10体などの場合もあり，左右で８体，12体，20体ということになる。左右それぞれの八部衆の構成として，やはり，八部衆における代表的な尊格である阿修羅や迦楼羅などを含むため，左右でそれぞれに阿修羅像などをあらわし，結果的に同一画面に計２体の阿修羅像などがあらわされることになったと思われる。

初唐における八部衆は，着甲する神将形像と，阿修羅，鬼神形像，天部形像で構成されていた。八部衆像の図像については，三面六臂で鈎状持物と天秤を持つ阿修羅をはじめ，竜，摩睺羅伽，鳥頭人身の迦楼羅など，いずれも莫高窟に限らず，四川省および韓国の八部衆像においても共通する図像的要素をふんだんに含んでいた。

盛唐における八部衆像も，着甲する神将形像，阿修羅，鬼神形像，天部形像で構成されており，鬼神形像が占める割合が際だって多くはない。図像に関しても初唐の傾向をおおむね引き継ぎ，さらにヴァリエーションを与えており，阿修羅は三面六臂像が大半で，これは初唐の流れを受けている。阿修羅のみならず，摩睺羅伽，竜，迦楼羅なども複数があらわされるようになるが，これはやはり，同一壁面に二組の八部衆像を配置するためと解釈されよう。同一の尊格は図像の細部に変化が加えられており，摩睺羅伽では蛇の巻き方を変え，竜では異なる持物を持つ。また，迦楼羅については，鳥頭人身の迦楼羅のみならず，人頭人身で頭上に鵞鳥，鳳凰，孔雀などをのせる図像が登場する。これも，複数の迦楼羅をあらわすことから生じたものと思われる。

中唐以降の八部衆において，同一壁面に二組の八部衆があらわされるために生じた同一尊像の複数化やそれに伴う図像の細部に変化が加えられる点，獣皮を被る神将像（獅子皮，鹿皮，象皮，マカラ）や鳥をモティーフとする像および摩睺羅伽，竜などの図像に関しては初唐や盛唐にみられる図像がそのまま用いられている点など，初唐から盛唐における八部衆像の傾向を継承している側面も確かにある。しかし，次のような点でこれまでの八部衆とは異なる点が生じている。第一に，八部衆を構成する尊像に天部形像が含まれなくなり，鬼神形像が占める割合が多くなる。第二に，阿修羅の図像に変化が生じ，六臂から四臂の阿修羅像が大半を占める。

また，三面のうちの本面に第三眼をあらわすものが主流を占めるようになる。

晩唐～五代における八部衆も，中唐において新たに生じた傾向をそのままあらわしている。八部衆像の配置に関しては，これまで主室の壁面に描かれた仏説法図，経変，維摩会，騎象普賢・騎獅文殊などに八部衆があらわされていたが，晩唐以降，前室の左・右壁に八部衆像を配置する例がしばしば確認された。このような窟内における八部衆像の配置により，莫高窟および楡林窟において八部衆像が守門・守護の役割を帯びていた可能性がうかがえる。また，窟の入口の左右や龕口の左右にあらわされる騎象普賢と騎獅文殊および維摩会は，一対であらわすことによって窟内を守護する側面もあると考えられており，作例は多い。このような尊像に八部衆が付随することからも，莫高窟と楡林窟における八部衆像は仏･菩薩に対する守護の眷属であるとともに，窟全体・龕全体を守護する役割を担う尊像として認識されていた側面も強かったと思われる。

このように，莫高窟および楡林窟における八部衆像の流れを見て行くと，中唐以降の八部衆の流れには，それまでの初唐から盛唐までの八部衆像の要素に，さらに何か別の要素が加えられ，新たな流れを形成しているといえる。中唐において付加された別の要素を導き出すためには，次の点が大いに参考になろう。

莫高窟の北魏窟から北周窟にかけて，窟内に多数の鬼神像をあらわすことが多い。第435窟（北魏），第288窟（西魏），第428窟（北周）などの中心柱下部および腰壁部分にあらわされる鬼神像で，体に裙もしくは褌を付け，天衣をまとい，頭部は先端の尖った獣耳や炎髪としたり，また獅子，犬，猿，駱駝，山羊，鹿などを頭部とする場合もしばしば確認された。これらの鬼神像は窟内の守護の役割を担っている。また，第285窟（西魏），第297窟（北周）など，獣耳･炎髪の鬼神像を龕口の左右に配置させることにより，守門の役割を果たしているといえる。このように，莫高窟においては，鬼神像や獣皮をまとう像が守護の役割を担う像として造像されていた。初唐以降の窟において，鬼神像とともに獅子皮や虎皮などの獣皮をまとう尊像が，四天王の従者としてあらわされる場合も多く，獣皮をまとう尊像が必ずしも八部衆に限られた図像とはいえない。このような莫高窟および楡林窟における鬼神の類によって守護・守門，従者の役割を担ってきたという伝統的要素が，この地域の八部衆像の形成を考察する際に，一つの手がかりになると思われる。

例えば，中原地域においては，八部衆が造像される以前はいわゆる「神王像」と称される鬼神像が窟内の守護の役割を果たしていた。鞏県石窟第１窟，第３窟，第４窟，北響堂山北窟・中窟，南響堂山第５窟・第７窟，水浴寺西窟など，中原地域の諸石窟を中心に造像例が知られている。竜門石窟においても，北魏に彫刻がすべて完成した賓陽中洞においては神王像が南・北壁下部に浮彫りされていたが，初唐の完成とみられる賓陽北洞では神王像にかわり，阿修羅を含む八部衆とみられる群像が配置されている。この中には阿修羅像とともに口から連珠を吐き出す像などがあらわされ，これは神王像の中の珠神王と共通する図像であることから，中原地域においては神王像に置きかわって八部衆像が窟内の守護の役割を担うようになり，その移行期においては，神王像の図像を取り込む形で造像された八部衆もあったと思われる[21)]。

中原地域において生じた神王像から八部衆へのこのような転換のプロセスが，莫高窟においても生じたと考えられる。莫高窟において，北魏から隋代の窟にみられた守護の役割を果たす鬼神像の類が，初唐以降に八部衆という集合尊の枠組みに転換したと思われる。しかし，中原におけるプロセスと状況を異にしているのは，八部衆という枠組みとその図像が中原地域において形成されたのに対し，莫高窟においては，初唐において八部衆という枠組みとその図像を中原地域から移植して八部衆像の造像がはじめられたとみられることである。莫高窟の初唐窟における阿修羅像の図像が中原地域，四川省，韓国の作例とも共通しており，初唐以前の莫高窟において造られていた須弥山の前に立つ阿修羅像の図像と初唐以降の八部衆の中の阿修羅像との図像的関連

が希薄であることからもうかがえよう。このような状況により，初唐以降，窟内の各壁面下部および中心柱下部にこれまでのような鬼神像をあらわすことが急激に行われなくなり，鬼神像から八部衆像への移行が速やかに行われたものと推測される。

対して，莫高窟において中唐以降の作例には，中原地域および四川省，韓国の八部衆像との関連が希薄となっており，莫高窟および楡林窟に限った特徴が随所に見出せるようになる。むしろ，地域的・伝統的な鬼神像の要素を再び取り入れたといえるであろう。八部衆の中に鬼神形像が多く含まれるようになったり，阿修羅像の図像が初唐以前の八部衆でない阿修羅，つまり，須弥山の前に立つ阿修羅像の影響が復活したりする。その背景としては，敦煌において八部衆が定着するに従い，地域的・伝統的な要素がこれまで以上に表面にあらわれた結果であり，敦煌における八部衆像の土着化が進んだ結果と思われる。これには，中唐期において，敦煌地域における唐の中央政権の直接的支配が弱まったこととも無関係ではないと思われる。

## 4．中国四川省における八部衆像との比較

以上，これまで順を追って確認したところ，莫高窟および楡林窟における八部衆像の造像は，幾つかの点で四川省の八部衆像の造像とは異なる様相をみせている。

比較の点から，四川省における八部衆像の外観について若干ながら触れておこう。四川省では，広元皇沢寺，広元千仏崖，巴中の西龕と南龕，丹稜の鄭山と劉嘴，蒲江飛仙閣など，初唐から晩唐までの石窟・石龕において八部衆像が造像される。現存作例からみて八部衆は必ずしも８体で構成されるわけではなく，八部衆像が仏・菩薩などの主要な諸尊の背後の壁面に浅浮彫りであらわされていることから，壁面のスペースに応じた数の変化は余儀なくされ，阿修羅・竜の２体のみであらわされる場合や，阿修羅・竜・迦楼羅・乾闥婆の４体で構成される場合もみられる。また，主尊も釈迦に限らず，阿弥陀，弥勒などにも八部衆像が付随している。四川省の八部衆像は着甲する神将形像の形式をとるものが極めて少なく，さらに，晩唐以降は，それまで八部衆が配置されていたところに通形の比丘像や供養者像が置きかわって配置されるようになる。したがって，四川省における八部衆像は，守護の尊像というよりはむしろ，仏の説法の場に集う諸々の衆生としての役割が強いと思われる。

莫高窟・楡林窟の八部衆像も，四川省の作例と同様，必ずしも釈迦にのみ付随する尊格ではなく，さらに，必ず８体で構成されるという拘束性を持たず，画面のスペースに応じて変化するものであった。この点では共通するが，四川省の八部衆像においてはみられない特徴として，莫高窟および楡林窟では維摩会や騎象普賢・騎獅文殊など，維摩居士と文殊菩薩，騎象普賢と騎獅文殊というように左右一対になって構成される主題においても八部衆像があらわされることが多い。さらに前室の左右壁に主尊を伴わずに八部衆像があらわされることも確認された。

四川省の八部衆像が，守護の役割よりはむしろ聴講者的な性格を帯びていたのに対し，莫高窟および楡林窟においては，維摩会や騎象普賢・騎獅文殊が東壁入口左右や西壁龕口左右に配置されることが多く，このような配置から，窟内全体の守門や守護の役割を帯びることもあったと思われる。

また，八部衆を構成する尊像について，莫高窟および楡林窟においては同時に複数の鬼神形像と獣皮を被る神将形像を含んで八部衆を構成し，天部形像が極めて少ない。対して，四川省の八部衆においては獣皮が獅子皮を被る「獅子皮」のみであり，鬼神形像については，頭もしくは首に蛇を巻き付ける像，炎髪もしくは巻髪で棍棒を持つ像，炎髪もしくは巻髪で腕に子供を抱える像，頭に蛇を巻いて腕に子供を抱える像などの図像を

持つ鬼神形像の中で，1体のみが登場するにすぎない。この点において，四川省における八部衆像の構成とは大きく異なっており，この傾向は中唐以降の窟においてより顕著となる。

さらに，四川省の八部衆において，阿修羅像を含まずに構成された八部衆像は確認されない。対して，莫高窟および楡林窟においては，阿修羅像が含まれないこともしばしば確認された。阿修羅は八部衆における代表的な尊格であるため，阿修羅を欠く莫高窟・楡林窟の諸像について八部衆とは規定できないかもしれない。しかしながら，竜，迦楼羅，摩睺羅伽，「獅子皮」，その他の獣皮を被る像，腕に子供を抱いたり蛇を巻き付けたりする鬼神形像など，すべてが八部衆にも登場する尊像であり，八部衆としての尊像の図像を共有していることは明らかである。八部衆を構成する着甲神将形像や鬼神形像の図像が，八部衆でない諸像の図像として共通して用いられる点も，四川省においては見出すことができなかった点である。

阿修羅像の図像については，初唐の莫高窟第220窟の阿修羅像は，四川省の広元皇沢寺大仏窟（初唐），丹稜鄭山第61龕（754年），巴中南龕第73龕（晩唐）などと共通し，三面六臂で左右第一手を合掌手とし，左右第二手に日輪・月輪，左右第三手に天秤・鈎状持物を持つ図像であった。このように，初唐までの図像に関しては両者に共通する要素が多かった。しかし，四川省においては初唐，盛唐，晩唐においても同一の図像が確認されるのに対し，盛唐期の莫高窟・楡林窟においては持物の組み合わせが異なる等の変化が生じ，中唐以降，四川省とは全く共通した図像が見出せず，むしろ，初唐以前にこの地域において造像されていた須弥山の表現を伴う阿修羅像などの図像へと回帰する傾向が認められた。

以上のような点において，莫高窟および楡林窟における八部衆像の図像と展開は，四川省の諸窟・諸龕における八部衆像とは異なる様相を呈している。莫高窟および楡林窟において，特に中唐以降に生じた変化は，地域的・伝統的要素の復活に起因するものであったと推測される。

## む　す　び

莫高窟および楡林窟において，八部衆像の造像は初唐から五代の石窟において確認される。八部衆が造像される以前に，この地域には鬼神像や獣皮をまとう鬼神像により守護・守門の役割を担うという伝統があり，この伝統的要素の上に，初唐期に中原から八部衆という集合尊の枠組みとその図像が新たに持ち込まれたところから，この地域における八部衆像の造像がはじまったといえる。初唐および盛唐においては，新しく持ち込まれた図像により八部衆の造像が行われていたため，中国の他地域との類似点を見出すことが多かった。しかし，この地域において唐の中央政権の直接的な支配が薄らいだ中唐時代に至って，これまでの八部衆像の要素に変化が生じ，別の要素が付け加えられ，新たな流れを形成している。これは，初唐にもたらされ盛唐まで継承されていた八部衆像の要素の中に，この地域の伝統的な要素が復活し，取り入れられたことによるものであろう。中唐以降の八部衆像の中に，守護神としての鬼神像の伝統が再び取り入れられといえる。すなわち，これは八部衆像の土着化が進んだことを意味している。その過程で遂げた変化によって，他地域の作例とは異なる様相を呈することになったといえよう。

## 註

1）十二天像の形成に関しては次の論文に詳しい。濱田隆「十二天画像の研究(1)～(4)」，『仏教芸術』44号，1960年10月，pp. 24～44；49号，1962年9月，pp. 17～34；71号，1969年7月，pp. 63～77；73号，1969年12月，pp. 81～100。

2）韓国における八部衆像については，以下の拙稿を参照されたい。「統一新羅後期の石塔基壇上部を構成する尊像に

ついて～韓国の八部衆像の研究のための一段階として～」,『名古屋大学古川総合資料館報告』14号，1998年12月，pp. 83～107。「韓国江原道襄陽郡陳田寺址三層石塔の八部衆像について」,『美学美術史研究論集』第16号，名古屋大学文学部美学美術史研究室，1998年12月，pp. 53～84。「慶州崇福寺址東・西三層石塔の八部衆像について」,『仏教芸術』249号，2000年３月，pp. 50～82。「阿修羅の図像について～韓国の八部衆における阿修羅像を中心に～」,『密教図像』第19号，2000年12月，pp. 59～75。

3）中国四川省の八部衆に関しては，拙稿「中国の八部衆の図像について（１）～四川省の八部衆像の報告をかねて～」,『名古屋大学古川総合資料館報告』第15号，1999年12月，pp. 83～105。

4）調査は名古屋大学大学院文学研究科教授宮治昭先生を代表とし，京都市立芸術大学助教授定金計次先生，奈良教育大学助教授山岸公基先生，名古屋大学助手中川原育子氏，日本学術振興会外国人特別研究員朴亨國氏とともに行われた。

5）莫高窟第220窟北壁の主題については,〈西方浄土変〉,〈過去七仏浄土〉,〈七仏薬師を中心とする東方薬師変〉など，様々な見解が成されている。本稿では，東山健吾氏による〈七仏薬師浄土変〉によるものとする。東山健吾「敦煌莫高窟第二二〇窟試論」,『仏教芸術』133号，pp. 11～33。

6）第220窟の神将像群が薬師如来に付属することから，阿修羅像が含まれることを疑問に感じながらも，十二神将像と同定されてきた。逆に，阿修羅像を含んでいても中尊が釈迦如来でないことから八部衆とは同定されなかった（東山健吾前掲論文，pp. 23～24)。

7）灌頂記『観音義疏』（６世紀後半）巻下,『大正蔵』33－629上。慧沼記『十一面神呪心経儀疏』（７世紀後半～８世紀初),『大正蔵』39－1009上。

8）同窟の金棺出現の場面においても，向かって右側に①三面六臂で左右第一手を合掌手とし，左右第二手に日輪・月輪を持つ阿修羅と②「鹿皮」の２体，向かって左側に③「獅子皮」と④竜の２体をあらわし，４体からなる八部衆像である。

9）秋山光和「唐代の敦煌壁画～フォッグ美術館所蔵の断片を中心に～」,『仏教芸術』71号，1969年７月，pp. 81～95。および「敦煌壁画研究の新資料～James Lo氏撮影写真とフォッグ，エルミタージュ両美術館所蔵の断片の検討～」,『仏教芸術』100号，1975年２月，pp. 77～93。

10）第159窟では，西壁南側騎象普賢の中には，①神将形像・迦楼羅：鳥頭人身。面部に嘴と頬の肉垂があらわされ，持物は不明である。②神将形像・摩睺羅伽：頭上に蛇をあらわし，持物は不明である。③鬼神形像：頭髪を炎髪とし，持物は不明である。北側騎獅文殊の中には，④鬼神形像：頭に１角をはやす。持物は不明である。⑤鬼神形像：頭髪を炎髪とし，腕に子供を抱える。⑥神将形像・竜：頭上に竜をあらわす。持物は不明である。⑦神将形像・「孔雀」：持物は不明である。などの尊像が，多数の菩薩形像と共にあらわされている。

11）第231窟においては，西壁南側騎象普賢の中に，①神将形像・「マカラ」：頭上にマカラをあらわす。持物は不明である。②神将形像・「獅子皮」：頭部に獅子皮を被り，顎下で獅子の前脚を結ぶ。琵琶を持つ。③鬼神形像：炎髪とし，腕に子供を抱える。北側騎獅文殊の中に，④神将形像・竜：頭上に竜をあらわす。持物は不明である。⑤神将形像・摩睺羅伽：兜を被り，兜上に蛇をあらわす。右手に剣を執る。⑥鬼神形像：炎髪とし，左手に蛇を巻き付ける。などの尊像が，多数の菩薩形像と共にあらわされている。

12）題箋状の尊名の書込が設けられていのは，次の尊像である。①阿修羅，「阿修羅王」。②神将形像・摩睺羅伽（その１)，「迦楼羅王」。③神将形像・「マカラ」，空白のまま。⑥神将形像，「揭路荼王」。⑧神将形像・「獅子皮」，空白のまま。⑩神将形像・「鹿皮」,「緊那羅王」。それぞれの題箋状の尊名の書込に関しては誤解と混同が目立つ。阿修羅など，特徴的な図像を有する尊像に関しては，いつの時代においても比較的誤解がないまま認識されたと思われるが，その他の尊像については，特に緊那羅や乾闥婆などは，経軌においても明確な記述が必ずしもなされているとはいい難い。このような拘束性のなさが，八部衆の各像の尊名を明らかにし難い要因となっている。

13）朴亨國「大阪金剛寺金堂の金剛界大日如来・不動・降三世の三尊形式に関する一考察～中国四川省盤陀寺石窟の大日三尊龕の紹介を兼ねて～」,『仏教芸術』第252号，2000年９月，pp. 35～72。

14）石窟庵においては，前室右壁に阿修羅や竜などの４体，前室左壁に金剛杵（三鈷杵）を執る像や口から輪状の連珠

を吐き出す炎髪の像などの４体が配置され，合計８体で構成される八部衆像であり，いずれも岩座上に立つ。石窟庵の八部衆に関しては次の論文を参照。朴亨國「慶州石窟庵諸仏像に関する仏教図像学的考察」，『新羅文化』21号，2000年12月。

15)『大正蔵』20－129中。

16) 灌頂記『観音義疏』巻下，『大正蔵』34－629上。

17) なお，韓国の高麗時代以降の仏画の中に，(2)と(3)のタイプの迦楼羅像があらわされており，迦楼羅像の図像の変化としては，やはり(1)人身鳥頭から(2)「鳥（鵞鳥？）」・(3)「鳳凰」・(4)「孔雀」へと移行するものと思われる。

18) 菩提流志訳『一字仏頂輪王経』巻一，巻四（『大正蔵』19－225上，248下），『如意輪陀羅尼経』（『大正蔵』20－193下），『不空羂索神変真言経』巻下（『大正蔵』20－260上）など。

19) 対して，四川省においては巴中南龕第25号龕（晩唐），大足宝頂山六道輪廻図（晩唐）など，八部衆ではない阿修羅像も八部衆の阿修羅像と同様に三面六臂で左右第一手を合掌とし，日輪・月輪，天秤・鈎状持物を持つ図像が多いことから，四川省においては八部衆の中の阿修羅の図像がもととなり，他の阿修羅にもその図像が導入されたと考えられる。拙稿「阿修羅の図像について～韓国の八部衆における阿修羅像を中心に～」，『密教図像』第19号，2000年12月，pp. 59～75。

20) 敦煌第320窟では九稜形宝輪，広元千仏崖二仏並坐窟および千仏窟では七稜形宝輪，巴中南龕第70号龕および巴中西龕第16号龕では円形宝輪，韓国石窟庵では七稜形宝輪であり，莫高窟第320窟の阿修羅像は右手を上げて片手で持つのに対し，四川省の阿修羅像では左右第一手で胸前で挟み持ち，石窟庵の阿修羅像では左第一手に持つなど，宝輪の持ち方も大きく異なる。

21) 第20回密教図像学会学術大会（2000年12月２日，於成田山新勝寺第１講堂）において，「中国における八部衆の図像の成立に関する一試論～竜門賓陽三洞の諸像を中心に～」と題する口頭発表を行った。

〔付記〕

本稿の作成にあたり，名古屋大学大学院文学研究科教授宮治昭先生に御指導いただきました。日本学術振興会外国人特別研究員朴亨國氏には多大な御助力を頂きました。また，本研究はメトロポリタン東洋美術研究センターの研究助成による研究成果の一部である。末筆ながら御礼申し上げます。

## 【表１】敦煌莫高窟の主な八部衆像

| 所在 | 時代 | 中尊／主題 | 数 | (3)多面多臂形（阿修羅） | | (1) 着甲神将形 | | | | | | | | | | | (2) 鬼神形 | | | | | | | | (4) 天部形 | その他・備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | | 獣皮 | | | | 鳥 | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | 三面四臂 | 三面六臂 | 竜 | 蛇 | 獅子 | 鹿 | 象 | マカラ | 鳥頭 | 鳳凰 | 鷲鳥 | 孔雀 | その他 | 蛇 | 童子 | 棍棒 | 槍 | 剣 | 三叉戟 | 獣骨 | その他 | | |
| 第220窟東壁 | 初唐 貞観16 (642) | 維摩・文殊 | ? | * | 合掌 鈎／天秤 | * | * | * | | | | | * | | | (数体) | * | | | | | | | (2体) | 2角 老相 | 2体の鬼神形像のうち，1体は現状肉色，1体は現状灰褐色。特徴が明らかでない神将像が数体。 |
| 第220窟北壁 | | 七仏薬師 浄土変 | 14 | * | 合掌（2体） | | | | * | | | | * | | | (4体) | * | | | | | | | | * | その他，何かの獣皮を被り，顎髭をはやす像1体。 |
| 第332窟南壁仏涅槃図 | 初唐 | 涅槃 | 4 | * | 合掌 | * | | | * | | | | * | | | * | * | | | | | | | * | * | |
| | | 金棺出現 | 4 | * | 合掌 | | * | | | * | | | * | | | | * | | | | | | | * | * | |
| 北壁 | | 維摩・文殊 | 6 | * | 合掌 | | * | | * | | | | * | | | (2体) | * | | | | | | | * | * | |
| 第334窟西壁龕頂 | 初唐 | 仏七尊像 | 8 | * | 合掌 | * | * | | * | | * | | * | | | * | | | | | | | | 宝珠 | 蓮華蕾型の頭飾 | その他，剥落のため不明な像2体。 |
| 第335窟北壁 | 初唐 | 維摩 | ? | * | 合掌 | * | | | * | | | | * | | | | | | | | | | | 獣耳 | 経巻 | |
| 第340窟西壁龕頂 | 初唐 | 二仏並坐 | 8 | * | 左1,胸前 右1,腹前 | | * | | * | | | 着甲ではない | * | | | 剣 | * | | * | | | | | | 1角 | |
| 第33窟南壁 | 盛唐 | 弥勒浄土 | ? | * | 合掌 鈎／金剛鈴 | | ◇ | | ◇ | | | | | | | | | | | | | | | | | 阿修羅の他，鹿皮像，頭に蛇をのせる像を確認。未調査。 |
| 第156窟西壁 | 盛唐 | 騎象普賢 | 2 | * | | * | * | 琵琶 | | * | | | * | | | * | | * | | | | | | | * | その他，菩薩像・神将像を多数伴う。 |
| | | 騎獅文殊 | 2 | * | | | * | | * | | | | * | | | * | | | * | | | | | | * | その他，菩薩像・神将像を多数伴う。 |
| 第172窟東壁 | 盛唐 | 騎象普賢 | 3 | * | | | * | | * | * | * | * | * | | | * | | | * | | | | | 2角 | * | その他，菩薩像・神将像を多数伴う。 |
| | | 騎獅文殊 | ? | * | | * | * | * | * | * | * | * | * | | | * | | | * | | | * | | * | | その他，菩薩像・神将像を多数伴う。 |
| 第320窟南壁 | 盛唐 | 阿弥陀浄土 | 8 | (現状で二臂のみ確認) 九稜型宝輪／三叉戟 | | | | | | * | | | * | | * | | | | * | | | | | | * | |
| 第445窟北壁 | 盛唐 | 弥勒浄土 | 8 | (現状で四臂のみ確認) 合掌 | | | (2体) 天衣 | 天衣 | | * | | | 天衣 | * | | * | * | | * | | | | | * | * | 胸飾を付け，天衣をまとう像としてあらわされ，着甲像ではない。 |
| 第129窟北壁 | 中唐 | 弥勒浄土 | 8 | | * | | | | | * | | * | | * | | * | | | * | | | | | (2体) | * | 鬼神形像2体とも，細部まで確認できない。 |
| 第158窟西壁 | 中唐 | 仏涅槃 | 11 | 三目 法螺貝 | * | | | | | * | | * | | | * | * | * | 1角 | * | * | * | * | * | * | * | 頭巾を被る老相人物1体。冠に「匡」の字が入った老相人物1体。 |
| 第159窟西壁 | 中唐 | 騎象普賢 | 3 | * | | * | * | 琵琶 | * | | | | * | | | * | * | 1角 | * | * | * | * | * | * | * | |
| | | 騎獅文殊 | 3 | * | | | | | * | | | | * | | | * | | * | * | * | * | * | * | * | * | |
| 第231窟南壁東側 | 中唐 | 浄土図 | 8 | 合掌？ | * | 合掌 | 合掌 | 琵琶 | * | * | * | 合掌 | * | 合掌 | * | * | * | | * | * | * | * | * | * | * | その他，形状が不明な像1体。 |
| 第237窟西壁 | 中唐 | 騎象普賢 | 5 | 五目 | * | 合掌 | | | * | | 剣 | | * | | | * | | | | * | | | | 1角 | * | |
| | | 騎獅文殊 | 5 | * | | * | * | | * | * | * | * | 剣？ | * | | 鳥頭斧 兜 | | | * | | | | * | | * | その他，何かの獣皮を被り，顎髭をはやす像1体。 |
| 第6窟西壁龕内 | 晩唐 | 観音立像 10弟子 | 1 | 三目 三叉戟 | * | 鳥頭斧 | (2体) 剣 | | 剣 | * | 剣 | * | 弓矢 | * | | 鳥頭斧 | * | * | * | * | * | * | * | (2体) | * | 鬼神形像2体のうち，1体は炎髪，1体は炎髪・三目。 |
| 第9窟東壁 | 五代 | 騎象普賢 | 7 | 合掌 | * | 剣 | 棒状 | | * | * | * | * | * | * | * | 剣 | | | * | | | | | (2体) | * | 鬼神形像2体のうち，1体は現状肉色，1体現状赤色。 |
| | | 騎獅文殊 | 6 | * | | 剣 | 蛇尾 | | * | * | | * | | * | * | 剣 | | | * | | | | | | * | その他の神将像は両手で剣を執る。 |

【表２】安西楡林窟の主な八部衆像

| 所在 | 時代 | 中尊／主題 | 数 | (3)多面多臂形（阿修羅） | | (1) 着甲神将形 | | | | | | | | | | (2) 鬼神形 | | | | | | | | (4) 天部形 | その他・備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | | 獣皮 | | | | 鳥 | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | 三面四臂 | 三面六臂 | 竜 | 蛇 | 獅子 | 鹿 | 象 | マカラ | 烏頭 | 鳳凰 | 鷲鳥 | 孔雀 | その他 | 蛇 | 童子 | 棍棒 | 槍 | 剣 | 三叉戟 | 獣骨 | その他 | | |
| 第25窟 主室北壁 | 晩唐 | 弥勒経変 | 8 | ＊ | | 棒状 | | | ＊ | ＊ | | ＊ | | ＊ | ? | ＊ | ＊ | | | 傘状飾付き | ＊ | | | ＊ | ＊ | 頭上に孔雀をのせる，もしくは兜頂に孔雀の羽根飾を付ける神将形像。 |
| 第16窟 前室南壁 | 晩唐～五代 | | 5 | 三目合掌 | ＊ | 鳥斧 | 剣 | ＊ | | | | ＊ | 剣 | ＊ | ＊ | 宝棒 | ＊ | | | | | | | ＊ | ＊ | |
| 第16窟 前室北壁 | | | 5 | 三目法螺貝 | ＊ | 剣 | 蛇尾 | | ＊ | | | ＊ | | | 弓/矢 | ＊ | ＊ | | | | | | | ＊ | ＊ | |
| 第12窟 前室南壁 | 晩唐～五代 | | 7 | 三目合掌 | ＊ | ＊ | 蛇尾 | ＊ | | | | ＊ | | | | （３体）剣 三叉戟 | ＊ | | | | | | | （２体） | ＊ | ３体の神将形像のうち，１体は持物を持たない。 |
| 第12窟 前室北壁 | | | 6 | 三目合掌 | ＊ | ＊ | 蛇尾 宝棒 | ＊ | | | | ＊ | | | | （３体）鳥頭斧 剣 | ＊ | | | | | | | | ＊ | ３体の神将形像のうち，１体は持物を持たない。 |
| 第12窟 主室南壁 | 晩唐～五代 | | 14 | 三目合掌 | ＊ | ＊ | ＊ | | 剣 | 鳥頭斧 | ＊ | 着甲しない | 三叉戟（幡付） | ＊ | ＊ | ＊ | ＊ | | | | | | 頭骨 | | ＊ | 中央にに牛骨１，その左右に別の頭骨を各１付けた頭飾を付ける。 |
| 第12窟 主室北壁 | | | | 三目合掌 | | 竜脚剣 | 蛇尾 宝棒 | ＊ | ＊ | ＊ | 剣 | ＊ | ＊ | ＊ | 鳥頭斧 | ＊ | | ＊ | | | | | ＊ | （２体） | ＊ | 阿修羅の臂数は確認できない。 |

**表1・2凡例**

1. (1)着甲神将形像は，上半身・下半身ともに着甲する武装した神将像である。表中には，持物その他の図像的特徴を記した。
2. (2)鬼神形像は，上半身裸形で筋骨たくましい異形像である。
3. 八部衆における(3)多面多臂形像は，いずれも阿修羅像である。
4. (4)天部形像は，着甲せず，忿怒相をあらわさない像である。
5. 八部衆の中の阿修羅像はすべて日輪・月輪を持つため，それらを除いた持物を記入した。
6. 持物が確認されないものについては記入しない。
7. 「＊」は，その像が含まれないことを示す。
8. 鬼神形像の「獣骨」とは，牛骨・人骨その他の骨を用いた装身具を付ける像を指す。
9. その他・備考蘭には，図像的特徴が明確でない像，剥落・後補などにより当初の姿が明らかでない像を記入した。